



左／2人が勤務している東京港区の建設現場。地上9階建ての建屋に70室の客室を持つ外国人をメインターゲットとしたホテルだ。
右／作業所職員の皆さんと。「7人中2人が女性。2人とも忍耐強くやってくれているので、このまま無事竣工を迎えて、喜びを分かち合いたいですね」(山口所長)。

私の仲間
komachi's point

入社二年目、施工図チェックを任せられて
設計部時代の忘れられないエピソードがある。「一年目がもうすぐ終わるといふころに、一緒に物件を担当していた上司が退職しました。」

「設計部当時の上司がとても理解のある方で、私が設計にも関わったその現場への配属を後押ししてくれました」

「設計部当時の上司がとても理解のある方で、私が設計にも関わったその現場への配属を後押ししてくれました」

「父がいろいろ考えてくれて、お前には建築が向いてるよって言ってくれたんですね。建築は総合芸術だから、やりたいことができるんじゃないかと。父は建設の仕事をしているわけではないんですけど、それを素直に聞きました」
大学の研究室で意匠設計を学び、設計事務所への就職も考えたが、「せっかく建築に関わるなら、設計だけでなくいろいろなことができる方がいい」と思い、安藤建設(現・安藤ハザマ)に入社した。マンションなどを設計する部署に配属された後、四年目の終わりに現場への異動が決まり、自らも設計に携わったホテルの建設現場に着任した。

「父がいろいろ考えてくれて、お前には建築が向いてるよって言ってくれたんですね。建築は総合芸術だから、やりたいことができるんじゃないかと。父は建設の仕事をしているわけではないんですけど、それを素直に聞きました」

「まさに、これがゼネコンのいいところなんだな、と実感しました。設計と施工を同じ会社の仲間が進めている。だから、設計監理担当者の経験不足は現場がフォローして、設計と施工が一緒になってお客様の満足するものをつくらうという態勢を組めたんです」

父の助言で建築を学び、ゼネコンへ

松本透子は、一九八六(昭和六十二)年、広島生まれ。小学校までは京都で過ごし、その後東京で育った。美術が好きだった姿を見ていた父親のアドバイスがきっかけとなり、大学で建築学科に進んだ。

「父がいろいろ考えてくれて、お前には建築が向いてるよって言ってくれたんですね。建築は総合芸術だから、やりたいことができるんじゃないかと。父は建設の仕事をしているわけではないんですけど、それを素直に聞きました」

「まさに、これがゼネコンのいいところなんだな、と実感しました。設計と施工を同じ会社の仲間が進めている。だから、設計監理担当者の経験不足は現場がフォローして、設計と施工が一緒になってお客様の満足するものをつくらうという態勢を組めたんです」

「失敗したことを泣きながら後悔し続ける私と、先を見据えて『こうやって直そう』という所長とで話し合っているうちに盛り上がり過ぎ

設計監理担当としての仕事をほとんど何も教わらないまま、施工図のチェックなど、監理担当者の仕事を一人ではしなければならぬ状況になりました。でも現場所長が先生みたいに、『現場とは』っていう部分から教えてくれて…」

その所長のバックアップによって、苦労しながらも何とか設計監理担当者としての仕事を全うすることができた。なおかつ、完成後の客先へのアンケートでも非常に高い評価を得ることができた。設計と施工、それぞれ別の会社が担当していたら、現場から助け舟が出るなどないだろう。

「失敗したことを泣きながら後悔し続ける私と、先を見据えて『こうやって直そう』という所長とで話し合っているうちに盛り上がり過ぎ

設計監理担当としての仕事をほとんど何も教わらないまま、施工図のチェックなど、監理担当者の仕事を一人ではしなければならぬ状況になりました。でも現場所長が先生みたいに、『現場とは』っていう部分から教えてくれて…」

その所長のバックアップによって、苦労しながらも何とか設計監理担当者としての仕事を全うすることができた。なおかつ、完成後の客先へのアンケートでも非常に高い評価を得ることができた。設計と施工、それぞれ別の会社が担当していたら、現場から助け舟が出るなどないだろう。

「失敗したことを泣きながら後悔し続ける私と、先を見据えて『こうやって直そう』という所長とで話し合っているうちに盛り上がり過ぎ

設計監理担当としての仕事をほとんど何も教わらないまま、施工図のチェックなど、監理担当者の仕事を一人ではしなければならぬ状況になりました。でも現場所長が先生みたいに、『現場とは』っていう部分から教えてくれて…」

その所長のバックアップによって、苦労しながらも何とか設計監理担当者としての仕事を全うすることができた。なおかつ、完成後の客先へのアンケートでも非常に高い評価を得ることができた。設計と施工、それぞれ別の会社が担当していたら、現場から助け舟が出るなどないだろう。

輝け!

けんせつ小町

現場監督

松本透子／北田和加奈

安藤ハザマ(仮称)芝パークホテル本館北棟建替計画



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



建設業界に女性が増えてきているとはいえ、一つの現場に複数の女性現場監督がいることはまだまだ珍しい。このホテルの建設現場では、2人の若い女性監督が円滑な工事進行を支えている。両名の建設業にける想いを聞いた。





現場所長になる。
それが私の夢 — (北田)

コンクリート打設の前に、型枠や鉄筋の状況を記録写真に収める。この記録が、建物が正しく基準に則って建設されたかどうかの判断材料になる。



設計の立場では見えなかった、
現場のチームとしての一体感を感じる — (松本)

現在の担当区分は内装工事。先輩と組んで各所を回り、図面と実際の施工状況を照合していく。「1日に3回くらい現場を巡回しますし、お客様や業者さんとの打ち合わせも毎日あります」

「私はまだ松本さんみたいな実績はありませんが、地元に戻って友人とお互いの仕事の話をした時に、今はホテルをつくっているよって言うのと、みんなに『すごいね』と言われて。もちろん私一人でやっていることではないですけど、

友人に誇れる仕事

「私はまだ松本さんみたいな実績はありませんが、地元に戻って友人とお互いの仕事の話をした時に、今はホテルをつくっているよって言うのと、みんなに『すごいね』と言われて。もちろん私一人でやっていることではないですけど、

と初々しく胸をなでおろした。

友人に誇れる仕事

「私はまだ松本さんみたいな実績はありませんが、地元に戻って友人とお互いの仕事の話をした時に、今はホテルをつくっているよって言うのと、みんなに『すごいね』と言われて。もちろん私一人でやっていることではないですけど、

と初々しく胸をなでおろした。

profile

まつもと・とうこ◎1986
(昭和61)年、広島県生まれ、京都府・東京都育ち。大学卒業後、2011(平成23)年4月、安藤建設(株)(当時)に入社。本社設計部門に配属され、単身用マンションや当ホテルの設計を手掛けた後、2015(平成27)年2月より現職。



profile

きただ・わかな◎1989(平成元)年、奈良県生まれ。大学院卒業後、2015(平成27)年4月、安藤ハザマに入社。研修期間を経て、同年同月より現職。

「内装担当と躯体担当、別々の主任について仕事をしてるので、2人が絡むことはあまりないんですけど、顔を見ればよく話しますよ」(松本)

建設業界以外の友人たちから見たら本当にすごいことをやっているんだ、形に残る、やりがいのある仕事だな、と思いますね」

地方から上京して初めての一人暮らしをしながら、男だらけの職場で、毎日刻々と変化する現場の状況に対処する。若い女性にはなかなか厳しい環境に思えるが、

「入社する前は、建設業で働く人には怖いイメージしかなかったんですけど、実際はみんな優しいです。例えば、重いものを運んでいたら『やってあげるよ』って手伝ってくれます。そういう面では、女性はちょっと得かかって思いますがね。私の父親くらいの年齢の方も、きちんと接してくれます」

「学生のように実際に建設業界で働いている女性のお話を聞いたのが、ゼネコンに就職する最終的な決め手になりました。同じように、建設業の女性と接する機会が増えれば、現場監督になりたい女性が増えるきっかけになると思うんです」

女性が働きやすい現場環境になってきているとはいえ、直面する課題として、家庭や育児との両立がある。

「私にはいつか所長になりたいという夢があります。そのためにも、結婚や出産もして、子育てをしながらでも現場監督を続けていきたい。非日常的な建物が好きなので、将来は商業施設とか、空港とかをつくってみたいですね」